住む人・使う人が主人公！

私たちは住む人・使う人の
立場に立って設計しています。
お気軽にご相談下さい。

京都建築事務所

〒　604－8083
京都市中京区三条柳馬場東入中之町１０
代表取締役社長　　川下　晃正
TEL　（075）211－7277
FAX　（075）211－7270
http://www.kyoto-archi.co.jp/

ヤングでは終わらないヤングケアラー

きょうだいヤングケアラーのライフステージと葛藤

仲田海人・木村諭志／著

閉じられそうな未来を拓く

ヤングケアラー経験者で作業療法士、看護師になった立場から作業療法や環境調整、メンタルヘルスの視点、看護や精神分析、家族支援の視点を踏まえつつ、ヤングケアラーの現状とこれからについて分析・支援方策を提言。

A5判216頁 定価2420円（税込）

たんの吸引等第三号研修（特定の者）テキスト

たんの吸引、経管栄養注入の知識と技術［改訂版］

NPO法人 医療的ケアネット／編

「医療的ケア児支援法」9月施行、2021年4月からの基本報酬の創設、加算・拡充を反映！

保育士、学校・幼稚園教職員、介護職員など医療職でなくても第３号研修を修了すれば「医療的ケア」が実施できる!

B5判総カラー220頁 定価2400円＋税

クリエイツかもがわ
CREATES KAMOGAWA

〒601-8382 京都市南区吉祥院石原上川原町21 https://www.creates-k.co.jp
TEL 075(661)5741 FAX 075(693)6605 送料240円(5000円以上無料)

京都に息づく福祉（れきし）にふれて

第26回社会福祉研究交流集会in京都で使用するビデオ取材をかねて、京都府北部の与謝、丹後や舞鶴に足を運びました。写真上は、引揚桟橋（ひきあげさんばし）です。第二次大戦後、舞鶴港は、おもにシベリア戦地からの引揚船を受け入れる引き揚げ港として使用されていました。終戦から何年か経っても桟橋の脇にたたずみ、わが子や夫を待ちつづける“岸壁の母・妻”であふれていたそうです。写真下は、「殉難（じゅんなん）の碑」です。第二次大戦勃発後、日本は朝鮮半島の人々を労働力として強制的に連れてきました。終戦直後の1945年８月24日、青森県で働いていた朝鮮人労働者が乗船していた帰国船「浮島丸（うきしまま る）」が舞鶴港に寄港した際、大きな爆発音とともに船体が二つに折れ沈没。乗客・乗員計549人が犠牲になり、1978年に「殉難の碑」が整備されました。

戦争さえなければ、こうした悲しくて悲惨なできごとは起きていません。戦争は二度と起こしてはいけません。

社会福祉法人よさのうみ福祉会の藤原さゆりさん（リフレかやの里施設管理者）。入職当時、藤原さん自身の給料がなかまのみんなより多いことに納得がいかなかったそうです。そこで、「私の給料の意味はなにか……」を必死に考え、なかまに自立した生活ができるくらいのあたりまえの給料を払えるようにすることだ、とさまざまな仕事づくりに日々奮闘されています。

峰山共同作業所（よさのうみ福祉会）の２階に、木工班があります。さまざまな形に切り抜かれた木にていねいにヤスリをかけ、なめらかな肌触りのコースターや一輪挿し（写真）など、さまざまな製品をつくっています。「木工班の作業が大好き」と写真の女性。

なかまがつくった製品は、ちかくにある大型スーパー内で、ほかのいくつかの作業所の製品と共同で独立店舗をかまえて販売されています。

京都市左京区にある京都市美術館別館には、全国水平社創立の地の碑があります。1922年3月3日、全国から3000人あまりが当時の岡崎公会堂に集い、全国水平社創立大会が開催されました。創立大会では、全国水平社宣言が読み上げられ、「人の世に熱あれ、人間に光あれ」という言葉で結ばれ、日本初の人権宣言と言われています。宣言では、卑屈な言葉や侮蔑的な態度でどれほど人は傷つくのか、だからこそ、人間を冒瀆（ぼうとく）してはいけない、だからこそ、人間の尊さや温かさが大切にされる世の中を心から願い、求めていくと書かれています。京都の歴史に人権と福祉の息吹を感じました。

（写真・文　高倉弘士）

福祉のひろば
2021年11月号

【ひろばトーク】
オンライン授業――その問題と可能性――　濵畑　芳和　6

●特集●　第26回社会福祉研究交流集会in京都
コロナパンデミックが浮き彫りにした社会と福祉
――どう変えていくか　10
だれのいのちも粗末にしない　コロナ禍を生きぬいて　勝原　祐子　12
――雨宮処凛さんの貧困支援の実践から
〈シンポジウム〉コロナ禍の福祉・暮らし・貧困の実態
石垣登美子　18
いまこそ、配置基準・処遇改善で福祉の充実を　清水日出美　24
「ジェンダー」の視点から福祉労働を考え、
その先に見えてきたこと　八木あゆみ　26
つながり、声をあげることの大切さ　藤原　民人　28
一人ひとりが安心して暮らせる社会　吉永みゆき　30
福祉の支援は地域づくりとリスペクト　田中　彰　32

●トピックス●
2020東京オリンピックの延期開催から考えなければならないこと
市井　吉興　34
コロナ禍で再認識　配置基準の改善が必要だ！　高倉　弘士　40

●連載●
WORK WORK――わくワク――　アクセスホームさくら　46
くるみタルト「馬九行久」～みんなうまくいくように～
ミリタンが実現するフランスの福祉
コロナ禍の「連帯」　安發　明子　48
かさねあい、はぐくみあう保育実践
みんながつながる保育園をめざして　三上　稀子　50
夕映えのとき～人生の終え方を支える実践～
悲しみに蓋をせず、受け止めることで見えてきたこと　佐藤明日香　54
ＪＯＢ＆ＡＣＴＩＯＮ　全国福祉保育労働組合（８）
社会的養護　いっそうの充実に向けて　58
私の履歴書　社会福祉経営全国会議（８）
権利としての社会福祉をめざして　正森　克也　60
阿修羅がゆく　わたしが好きな釜ヶ崎（28）　水野阿修羅　62
相談室の窓から　増え続ける小・中学校の不登校　青木　道忠　64
育つ風景　一歳児の心の揺れに大人も揺れる　清水　玲子　66
ひととしてあたりまえに生きたい
施設建設委員長として（３）　清田　廣　68
映画案内　『家族を想うとき』　吉村　英夫　70
現代の貧困を訪ねて
コロナ感染とコロナ不況が釜ヶ崎に押し寄せた　生田　武志　72
似らすとれーしょん道場　似顔絵まんがアート
デフォルメと手抜きは違うのじゃ！　ラッキー植松　74
ホームレスから日本を見れば　ありむら潜　76
花咲け！　男やもめ　川口モトコ　77

みんなのポスト　44／福祉の動き　78／今月の本棚　81
●グラビア●　京都に息づく福祉にふれて

●表紙の絵●
神門やす子

ひろば トーク

オンライン授業
――その問題と可能性――

立正大学社会福祉学部准教授　濵畑　芳和

新型コロナウイルスの流行にともない、昨年春以降、感染防止対策と両立しながら「学びを止めない」ためにドタバタと取り組みはじめたオンライン授業ですが、やはり従来の学びのすがたとは一線を画す別形態のものであることは否めません。登校が制限され友人たちとの交流もできない学生生活に苦痛を感じ、「大学生の日常も大切だ」と声高に批判する学生たちの心中を察するに余りあります。とはいえ、この経験から得られたアフターコロナの新たな学びのすがたや可能性も見えてきているように思います。

学生にはオンライン授業を受講するための環境を整えてもらう必要がありました。しかし、各家庭の状況はさまざまで、とくに経済的に余裕のない家庭にとってはきびしいものでした。自宅にウェブカメラ付きのパソコン、光回線などの安定した通信環境、プリンターがある学生はそう多くはありません。外付けのウェブカメラは品薄で入手困難でしたし、プリンターはおろかパソコンすらなく、スマートフォンだけで乗り切った学生もいました。月末にいわゆる〝ギガ不足〟で欠席する学生もいたりと、予定外の費用負担は深刻です。大学によっては数万円の給付をおこないましたが、継続的な経済的負担の軽減策は急務です。

次に、授業コンテンツの問題です。Ｚｏｏｍなどを活用した同時双方向型授業でも、先生の顔だけよりもスライドがあったほうが学生の理解を助けますが、ほとんどの教員が一から作成するか、オンライン授業用につくり替える必要がありました。また、学生がいつでも再生して受講できるオンデマンド型の授業動画は、放送大学にはとうてい及ばない見た目にとどまります。それでも対面授業の三倍以上の手間がかかり、教員の労働時間は限りなく延びました。私は、昨年度は週一〇〇時間以上、オンデマンド用の授業資料と動画作成、提出課題の確認、学生との応答等に忙殺されました。私のように過

はまばた　よしかず

鹿児島県志布志（しぶし）町（現・志布志市）生まれ。宮崎県都城市、宮崎市で育ち、立命館大学で社会保障法学に出会う。龍谷大学大学院に進み、その後短大の特任講師を１年、専業非常勤講師を4年勤め、立正大学へ。
現在、総合社会福祉研究所理事、本誌全国編集委員。

労死認定基準をはるかに超えて働く先生方も多くみられ、過労による発病や過労死が心配されます。

また「学生の日常も大切だ」と批判されたように、オンラインではどうしても学生同士の交流や課外活動全般まではカバーすることができません。「オンライン交流会」なども試みられていますが、やはり限界もあるなというのが実感です。学生生活とは授業だけでなく、学生どうしの交流などのキャンパスライフも大きなウエイトを占めていることがあらためて認識されることとなりましたが、それを保障する手立ては限られています。

ただ、オンライン授業のメリットや可能性も見えてきています。意外にも多くの学生から聞かれたのは「早起きして満員電車に乗ることなく一限目の授業に出られるのがいい」などという好意的な受け止めです。なかには下宿を引き払い遠方の実家から授業に出て、対面授業のときだけ新幹線で通学している学生もいます。「理解できるまで何度も動画を確認した」など、意欲的に取り組む学生にとっては、動画授業は理解の助けになっています。また、対人関係に不安を抱え欠席しがちで単位を落としていた学生が、オンライン授業ではすべて出席できて成績もすぐれている、という現象もみられています。遠方に居住するゲスト講師を呼んで授業で話してもらうことも、格段にやりやすくなりました。

学生の経済的負担や教員の過労等の諸問題は解決していかなくてはなりませんが、アフターコロナに向け、今後さらに積極的にオンライン授業は展開されていくと思います。コロナ禍の早期の終息を願うばかりです。

特集

「総合」的に社会をみて、次代を展望する

八月二八日（土）～二九日（日）にかけて、第二六回社会福祉研究交流集会in京都と、総合社会福祉研究所第三〇回定期総会を開催しました。昨年は、コロナ禍のなかで、オンラインで開催できる体制を整えることができずやむなく延期となり、今年一月のオンラインでの第二五回合宿研究会の経験を経て、二年ぶりの完全オンライン開催でした。はじめての試みのなかで、配信設備や進行などにたくさん課題は残しつつも、総合社会福祉研究所らしく、分野を超えたテーマで集い、学び、議論する場をもつことができました。

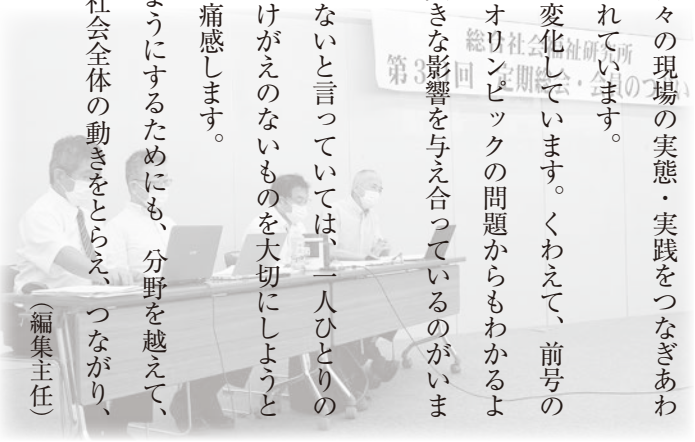
社会福祉研究交流集会は、一九九五年八月に、京都にて第一回目が開催されました。その前の一〇年間、民主的な社会福祉・社会保障の研究者を中心に毎年開催されてきた「社会福祉シンポジウム」をひきつぐかたちでのスタートでした。

第一回目のテーマは、「新世紀を展望する社会保障・社会福祉のパラダイム」です。総合社会福祉研究所前理事長の真田是（さなだなおし）さんはその基調講演で、次代を展望するときには、「〝どうなるか〟よりも〝どうしていくか〟というのが重要」であり、「自分たちがなにをしなければならないかということを含めた展望でなければいけない」と指摘しています。

今夏開催した第二六回目のテーマは、「コロナパンデミックが浮き彫りにした社会と福祉――どう変えていくか」です。はからずしも、真田前理事長が基調講演で大切だと指摘した、「どうしていくか」という点をサブタイトルに据えています。今号の特集は今集会の概要ですが、記念講演、シンポジウム、四つの分科会、入門講座について、集会に参加された大阪福祉事業財団の職員さんがレポートしてくださいました。みなさん、概要とともに、二日間の研究と日々の現場の実態・実践をつなぎあわせ、これから私たちはなにをすべきか、なにができるかを指摘されています。

私たちの社会は、グローバル化やデジタル化のなかで、急速に変化しています。くわえて、前号のデジタル化が福祉に与える影響や、今号トピックスで取り上げるオリンピックの問題からもわかるように、さまざまなものが分野を越えて、国を越えてつながり、大きな影響を与え合っているのがいまの社会です。

分野外のことはわからない、社会福祉以外のことはよくわからないと言っていては、一人ひとりのいのちやくらし、人と人との生身のつながりやそこで生まれるかけがえのないものを大切にしようとしない大きな社会の流れに、一瞬のうちに巻き込まれてしまうと痛感します。

次代を「どうしていくか」を展望するためにも、展望できるようにするためにも、分野を越えて、実践と研究の垣根を越えて、「総合」的に社会福祉・社会保障・社会全体の動きをとらえ、つながり、共同できる、総合社会福祉研究所でありたいと思います。

（編集主任）